

## 哲学者の芸術批評を読む 読書案内

内田樹『寝ながら学べる構造主義』、文春新書、2002年【新館4F 116.9/U】

内田樹、難波江和英『現代思想のパフォーマンス』、光文社新書、2004年【新館4F 133/N】

…まずは現代思想に入門。僕は大学2年生のときに授業で出会って、「そんな考え方ができるのか」と目から鱗が落ちました。最近の入門書のなかでいちばん面白いのは、内田樹さんの新書でしょうか。ぜひ一読をば。

### エリー・デューリング「運動を建築する」に興味をもったら……

ジョナサン・クレリー『観察者の系譜』遠藤知巳訳、十月社、1997年【新館4F 702.06/C】

アン・フリードバーグ『ヴァーチャル・ウィンドウ』井原慶一郎ほか訳、産業図書、2012年

【新館4F 778.04/F】

…カメラなどの技術装置の発達で、僕らの視覚や経験をどのように変容させたのかについて、さらに深めるにはこのあたり。技術と感性と社会が絡まり合って進展していく人類史の奥深さが見えてきます。

ピエール・レヴィ『ヴァーチャルとは何か』米山優監訳、昭和堂、2006年【新館4F 111/L】

マリオ・ペルニオーラ『エニグマ』岡田温司ほか訳、ありな書房、1999年【新館4F 701.1/P】

ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『哲学とは何か』財津理訳、河出書房新社、1997年

【新館4F 135.9/D】

…「ヴァーチャル」ということを哲学的に考えてみると、世界が違って見えてきます。レヴィの書物はわかりやすい入門書。ドゥルーズ+ガタリとペルニオーラの書物は、本格的な哲学書なので、ちょっと骨のあるものに挑戦したいときに。どちらも挑戦しがいのある刺激的な書物であることは請け合います。

### ハル・フォスター「セプテンバー・イレブン展」に興味をもったら……

ジョルジョ・アガンベン『アウシュヴィッツの残りのもの』上村忠男ほか訳、月曜社、2001年

ジョルジュ・ディディ＝ユベルマン『イメージ、それでもなお』橋本一径訳、平凡社、2006年

【新館1F 234.074/D】

…想像を絶するような出来事の体験や記憶を、どのように伝えることができるか。哲学と芸術と歴史が交差するこの大きな問題は、とりわけアウシュヴィッツの収容所をめぐって考察されてきました。その問題に、アガンベンが哲学から、ディディ＝ユベルマンが芸術学からアプローチしています。とくにアガンベンの本は、いちどは読んでもらいたい哲学書のひとつ。